

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成29年12月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科

職 名・学 年 研究員

氏 名 荻原祐二

助成の種類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成		
研究課題名	個人主義は関係性の希薄化を生じさせるか？日米比較による検討		
受入機関	アメリカ・カリフォルニア州・ロサンゼルス・ University of California, Los Angeles		
渡航期間	平成27年12月21日 ～ 平成29年2月7日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	3,000,000 円	
	使用した助成金額	3,000,000 円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	査証申請料	42,564円
		渡航費・滞在費	2,957,436円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本助成がなければ、海外での長期にわたる研究活動を行うことはできませんでした。誠にありがとうございました。 御財団の助成が今後も継続され、ひとりでも多くの京都大学の研究者が貴重な経験を積むことができることができればと思います。		

成 果 の 概 要

京都大学大学院 教育学研究科

研究員

荻原祐二

報告者は、アメリカカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) に、2015年12月より2017年2月まで約14ヶ月間滞在し、パトリシア グリーンフィールド (Patricia Greenfield) 教授の元で研究活動を行った。

グリーンフィールド教授は、文化・社会の変容と心理・行動の変化に関する世界的権威であり、文化の個人主義化を実証的に記述する研究を行ってきた。教授との議論を重ねていく中で、日本文化が長期間に渡って本当に個人主義化しているかどうかを実証的に確認することがまずは必要という結論に達した。グリーンフィールド教授が行ってきた研究との比較を通じて、日本文化の個人主義化の普遍性と特殊性を明らかにするアプローチが効果的と考えられた。そのため、日本文化が個人主義化しているかどうか、新聞データベースを用いて事前に検証した。その結果、予測通り、欧米の知見と一致して個人主義化が長期間に渡って進んでいることが明らかとなった。同時に、欧米の研究知見とは異なり、集団主義のいくつかの側面は維持されていることも明らかとなった。そのため、長期間に渡る日本文化の個人主義化を事前に確認したのと同時に、日本文化の様々な側面で個人主義と集団主義の間に乖離や葛藤が生じるために、関係性の希薄化が生じている可能性が示された。グリーンフィールド教授が行った中国における研究でも同様の現象が示されており、歴史的に集団主義的な文化における個人主義化が、関係性の希薄化を招くプロセスの一端を示した。上記の研究の更なる分析・追試的検討・考察を行いながら、より詳細なプロセスを明らかにする実験及び調査実施の準備中である。また、報告者のこれまでの研究をまとめた以下のレビュー論文を滞在中にも継続して執筆し、受理・公開された (財団より助成を受けたことを謝辞に記した)。これまでの研究をレビューすることにより、歴史的に集団主義的とされる文化において、個人主義化が進むことで様々な問題が生じているその様相やプロセスを俯瞰的に概観・整理することができた。

Ogihara, Y. (2017). Temporal changes in individualism and their ramification in Japan: Rising individualism and conflicts with persisting collectivism. *Frontiers in Psychology*, 8, 695. doi: 10.3389/fpsyg.2017.00695 <http://journal.frontiersin.org/article/10.3389/fpsyg.2017.00695/full> (オープンアクセス誌であり、どなたでもお読み頂けます)

Ogihara, Y. (in press). Economic shifts and cultural changes in individualism: A cross-temporal perspective. In A. Uskul & S. Oishi. (Eds.), *Socioeconomic environment and human psychology: Social, ecological, and cultural perspectives*. Oxford University Press.

そして、文化の変容を中心的に扱ったゼミや講義等に参加することができた。日本では、文化の変容を直接的に扱ったゼミや講義は少なく、これまで自分が知らなかった研究や理論につ

いても見聞を広げることができた。自身のこれまでの研究や、進行中の研究について発表し、多くのフィードバックを頂くこともできた。同様に、大学生・大学院生を対象にした講義の中で、自身のこれまで発表してきた複数の論文を取り上げて頂き、彼らと議論を行うことで、より理解を深めることができた。グリーンフィールド教授をはじめ、文化の変容を研究している研究者・大学院生と、自身の研究対象に関わりの深い議論ができたことは大きな収穫であった。同時に、共通するトピックについて扱う研究者とネットワークを築けたことは、今後の研究活動にとって大きな財産になると思われる。

さらに、上記の活動を通じて、特に英語のスピーキングに関して成功体験を積み重ね、自信を持つことができた。国際的に活躍する研究者になるためには、英語による「読み」「書き」だけでなく、一定のレベル以上で「話す」「聞く」ことも必要である。日本にいる間は、こうした能力を高める機会があったとしても、喫緊の仕事のために後回しにしてしまい、結局有効活用できないことが多かった。ゼミや講義等の研究場面だけでなく、日常の会話も含めて、多くの機会を経験することで、語学力を高めることができた。

加えて、アメリカ文化を肌で感じることができた。これまで、アメリカには国際学会の参加や3カ月程の短期滞在はしたことがあったが、比較的長期的な滞在をしたことはなかった。3カ月程の滞在では、やっと異文化に慣れてこれからという時に帰国しなければならなかった。文化と人間の心理・行動の関連を明らかにしようとする文化心理学を専攻としている報告者にとって、実際に日本と異なる文化に身を置き、その文化や人々に深く関与することが必要不可欠である。これまで短期的な滞在では不可能であった意義のある経験を数多く積むことができた。

謝辞

今回の滞在は、これまで行ってきた研究を発展させると共に、グローバルな環境でも活躍できる研究遂行能力・語学力・ネットワークを培うことができた非常に貴重な機会となりました。そして、貴財団の助成がなければこのような大変貴重な経験を積むことはできませんでした。今後の研究生活にとって非常に重要な経験となったと確信しています。この貴重な機会を得るにあたって助成を頂きました京都大学教育研究振興財団に心より感謝申し上げます。